

資料紹介

名古屋城二之丸庭園出土の実包について

佐藤 公保

はじめに

名勝名古屋城二之丸庭園は名古屋城域の北東に位置し、昭和40年代末以降、公園整備に伴う発掘調査が度々行われてきた。特に平成25年(2013)から始まる公園整備に伴う発掘調査は、現在も継続して実施されおり、令和元年度の発掘調査で7次を数える。既に平成25年度から27年度分の成果は『名勝名古屋城二之丸庭園 発掘調査報告書 第1次(2013)~第3次(2015)』(2017名古屋市)としてまとめられている。現在、平成28年以降の4次から6次調査の成果をまとめており、令和元年度中に『名勝名古屋城二之丸庭園 発掘調査報告書 第4次~第6次』を刊行予定である。

1. 名古屋城二之丸近代概史

名古屋城は、各地の近世城郭の多くが明治に入り国に接収され陸軍の駐屯地になったのと同じく、明治5年(1872)から陸軍が駐屯するようになった。同時に多くの城郭は破却されたが、幸運にも名古屋城の天守閣や本丸御殿等の本丸内の多くの建物は破却を免れた。一方、二之丸にあった庭園の多くと二之丸御殿等の建物はその難を免れることはできなかったが、庭園の北園池とその周辺の築山の一部が将校集会所の裏庭として改修を受けながらも存続した。皮肉にも天守閣等の本丸にあった構造物は太平洋戦争末期、昭和20年(1945)の空襲によって焼失したが、二之丸に所在した陸軍関連の施設は被災を免れた。戦後、陸軍

関連の施設は取り壊され、一部が大学関連の施設として再利用された。最終的には公園整備が始まる昭和40年代末頃までには取り壊されていった。

二之丸地区の表土下には明治から昭和にかけての近現代の遺構が眠る。この地を発掘調査することにより、近世から近代そして現代へと名古屋城の変貌を考古学的に垣間見ることが出来るのである。その一つとして明治から昭和まで陸軍が駐屯していたことを明確に示す考古資料を散見することができる。

今回はそれを如実に示す明治期の陸軍が使用していた実包の薬莢を紹介したい。

2. 出土地点について

紹介する薬莢は平成28年度に実施された5次調査で北御庭地区の北西にある築山の一つである栄螺山の東園路の表土から出土している。栄螺山は文政期に築庭されたものであるが、明治12、13年に吉田紹和の指導の下に大島嘉吉が将校集会所の裏庭を築庭した際に(註1)、栄螺山はじめ、北園池、権現山等の一部が改修され裏庭に取り込まれた。頂部には忠靈祠が築かれ、それを参拝する将兵が絶えなかったという(註2)。また近くには将校集会所や倉庫、弾薬分配所等の陸軍の施設が存在した。

3. 出土遺物について

出土した遺物は薬莢である。全体的に薄く緑色の鏽が生じているため、銅成分を含む金属でなっていることが判る。弾頭部は欠損し、円筒形であるが先端はつぶれている。残存長 5.7cm、胴部径 1.4cm、底部径 1.7cm である。底部は体部より大きく、底面は径 1.1cm ほどが円形状に 0.1cm ほど出っ張っている。底面中央の雷管の部分は径 0.2cm ほど、円形にへこんでおり、発射後の状況を示している。底面は鏽のため刻印の有無は確認できていない。なお同型の薬莢は二之丸庭園の他の地区で 2 発、本丸搦手馬出の石垣調査で 1 発出土している（註 3）。

4. 考察

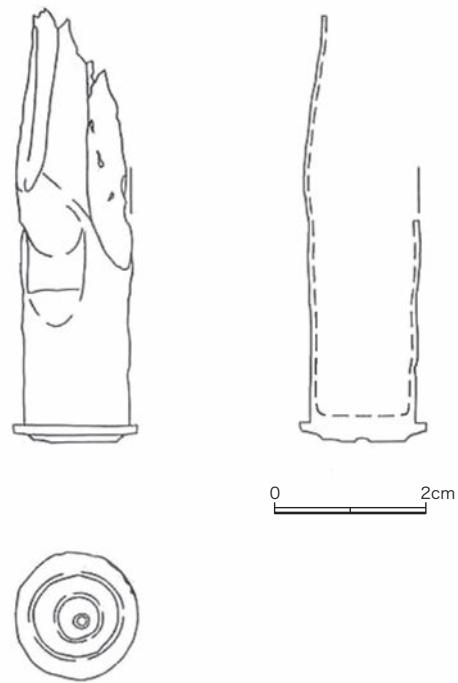
現在使用されている自動小銃の実包は無煙火薬を使用し、金属薬莢が一般的で、5.56mm と小口径である。発射後、薬莢が自動的に排出されるようなシステムを持つ。薬莢を引っ掛け排出するためのエJECTORがスムーズに作動するように底部に近くに溝を持ち、底面は平坦である。

これに対し、出土した実包の薬莢は、胴部径等をみても大口径であり、一番の特色は排出のための溝がなく体部は寸胴である。また底面が雷管部を中心に出っ張り、平坦になっていない。また、出土遺物洗浄時に他の地点で出土した実包の中に弾頭はないものの薬莢内に火薬と思われる内容物が残存しているものが確認された。そのため地元の警察に通報、処理してもらった際に、こぼれ出した内容物は立ち会った警察官によると黒色火薬であるらしいとの所見もいただいている。

こうした点から、この実包は現代の自動小銃のものではなく、近代のもの、しかも黒色火薬を利用していること、排出のための溝を有しないこと等のことから、小銃弾としては古い特徴を示す。この点から判断すると出土実包は、十三年式、

十六年式、十八年式村田銃のいずれかと思われる。この十三年式は明治 13 年に採用され、日清戦争で主力として用いられた口径 11mm の日本初の国産小銃である。いずれも単発式で、使用された火薬は黒色火薬である。明治維新後、急速に近代化した日本が軍隊においても外国に頼らず近代化を進めたことを顕著に示す証の一つである。この小銃弾は明治 22 年、無煙火薬を使用する口径 8mm の二十二年式村田銃が採用されると、次第に主力の座を譲っていった。

このことから実包は黒色火薬から無煙火薬へ切り替わる際に装備から外れ倉庫などにあったものが何らかの理由で廃棄された結果、二之丸や本丸での出土をみる結果になったと考えられる。



註

（註 1）狩野力「名勝 其二 名古屋城二之丸御庭」 1933

『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』

（註 2）歩六史刊行会『歩兵第六聯隊歴史』 1968

（註 3）『名勝 名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第 4 次

～第 6 次』名古屋市 2020